研究ノート

地方自治体との共同制作によるPR映像制作

斎賀和彦, 高田昌裕

【要旨】映像を教えるということと実際の映像制作現場には乖離があると言う。基本原則、理論に重きを置く教育現場と制作ツールの日進月歩と目まぐるしく変化する制作現場とでは同じにならないのが現実ではあるが、だから教育の場が机上論であって良いということにはならないはずだ。

本授業研究は、大学の所在地である地方自治体(飯能市)との共同事業という形で制作した地域産業(西川材)のプロモーションムービーを、学生を主要なスタッフとして制作することで、教育と実社会との連動、最新の映像制作トレンドの積極活用とそれを通してOJT的な学生のスキル向上を計ったプロジェクトの記録と考察である。

［キーワード］映像制作　地域貢献　産学協同　プロモーション映像　OJT

1．はじめに

制作の背景と制作チーム編成

発端は本学部の大学院委託授業（地方自治体職員受け入れによる特別授業）の受講生であった飯能市森林課からの相談であった。地域の主要産業のひとつである西川材の訴求に映像を使ったアプローチをしたい。制作を委託できないだろうか、という内容だった。

メディア情報学部のゼミナールとして映像制作を教えているものの、講義、演習としての映像制作と実際の映像制作の間には少なくない乖離がある。なにより過密な授業スケジュールのなか、ロケの多いであろう映像作品を制作する時間を確保することは困難であろうと思われた。ただ、その一方、学生をスタッフとして参加させ、実際の映像作品を制作するのは授業と現場の乖離を埋め、大きな教育効果を得られるであろうとも考えられ、悩ましい状況ともいえた。

その後、飯能市と打合せを重ねる中、映像をキーとした西川材の認知向上に関する飯能市と駿河台大学の共同研究事業とし、西川材PRムービー（仮）プロジェクトとして制作作業を行うこととなった。

チーム編成としては、斎賀が総監督としてコンセプトワーク、イメージラフの作成を行い、高田助手が監督として撮影現場の指揮、演出、を行う形を取った。教員が授業と並行してロケを含む多数の撮影を監督することは現実問題として不可能であり、週２日ベースの契約勤務である高田が実質的な制作主体となり、その下にゼミ OB および現役学生を配置する編成である。

飯能市農林課は監修として制作の全体を把握すると同時に、各取材先への調整を行って頂いた。後述するが、行政の幅広い人脈と調整能力は今回のプロジェクトの成功の大きな鍵となった。

2. プリプロダクション

このプロジェクトを進めるにあたって、企画の段階から飯能市農林課との綿密な打ち合わせ及び

イメージのすり合わせを行なった。材木という専門性の高い分野であることに加え、現在では地元の人間でも西川材への認識が薄いこともあり、伝える必要のある情報の取捨選択とそれらの映像化の現実性を考察するためである。

コアとなるビジュアルの開発。

先述した通り、木材は極めて専門性の高い題材である。我々が意識して木材を選定する機会というのは多くない。大きな機会が住宅に使用する建材だろう。しかしながら現在ではその住宅用建材でさえ工場でのプレカット及び製材が一般的になり、木材そのものを目にすることは滅多になくなった。

この意識の乖離を埋めるために我々は「ガラスと金属でできた現代の建築」と「西川材建築」の一画面内でのコラボレーションを検討した。飯能市が地元企業と共同開発した西川材プロモーション用移動式小屋「一坪キャビン」を活用し、同市と協定を結んでいる墨田区にある「スカイツリー」とのコラボレーションを企画した。

同時に、森と生活を繋ぐイメージとして、ひとと妖精の中間にある女性が森の中にたつキービジュアルを用意した。

3. プロダクション

はじめに、で記述した通り本プロジェクトの目標は一般の人間に西川材を認識してもらうことにある。したがって農林関係者の意見を集めつつ、多くの人にとっての魅力的な映像を制作することで地元の人間や業界関係者にも誇りとなってもらえる映像を目指した。それには森から材木になるまでの一連の記録をする必要があり、その撮影は非常に多岐にわたる。企画が動き始めた時期が10月に入っていたこともあり季節の問題も関係することが予想された。

前提１

映像を３本制作することとし、完全版としての各種説明を含む８分バージョン、イメージ先行型としての３分バージョンそしてスポット等でも使用できる15秒バージョンとする。ただしこれらの差異はナレーション及び編集、音楽等で吸収できる範囲内であると想定している。

前提２

映像の撮影にはスタッフの人数が必要となる場面が多い。コアとなるスタッフには株式会社泰輪から高田昌裕と、本校OBで現在（株）泰輪のスタッフとして動いている榎戸智幸を配置し、それ以外はメディア情報学部斎賀ゼミや間島ゼミなど映像制作系ゼミナールから学生バイトを募るという学内 OJT 形式として確保することを目標とする。この方法をとることで学生の撮影練度及び制作プロセスの理解度を深めることができると考えた。

普段の授業のなかでは体験できない実務を通したスキル向上が教育的観点からみた本プロジェクトの目的でもある。

メディア情報学部 制作チーム

前提３

全ての撮影は4K（4096×2160もしくは3840×2160ピクセル）を基本とし、最終納品形までその解像度を維持する。現在未だBlu-ray（1920×1080ピクセル）が一般的であり、4K解像度をもつUHD Blu-ray（3840×2160ピクセル）の普及には今後数年を要すると思われるが、各種イベント等での上映や次の世代への映像資産としての判断からこの決定を行なった。実際に使用する撮影機材においては4K解像度が標準になってきており、テレビ放送でも2018

年にはBSで4K放送が実用になる予定である。

前提4

各種映像を撮影する機材に関して。先立って打ち合わせを行なっていたイメージカットの多くは森の中での撮影であり、足場が良くないためにクレーンなどの大型特機の使用は困難を極めることは容易に想像がついた。

一方、そのスケール感を伝えるためには空撮が有効あることも制作チームおよび飯能市役所農林課の共通認識でもあった。そこで導入検討に入った機材として「電動ジンバル」と「ドローン」（※写真）がある。電動ジンバルとは撮影機材を載せて歩行しても安定した映像が撮れる特殊機械（特機）であるが、数年前までは大型であり非常に高価だった。ドローンに関しても同様で、空撮という性格上とても専門性が高く一大学で所有できる様なものではなかったが、近年では各種センサー等の性能向上で一般的になった撮影機材の代表格である。以上の理由から今回の企画ではこれらを活用し撮影を行うこととした。また、今後の映像制作

電動ジンバル

ドローン

においてこれらの特機はクオリティ向上のためには確実に必要なものとなることが予想され、学生に早期段階でオペレーションの体験をさせることも狙いのひとつであった。

前提5

およそ半年を通しての撮影及び4K解像度での撮影という要素からデータ容量は非常に大きなものになると想定された。特にメインカメラであるCanon EOS 1DX Mark2に関しては最高画質で撮影した場合1時間あたり400GB近い容量になり、一般的な2TBほどのハードディスクでは5時間ほどでいっぱいになってしまう計算になる。またデータレートが高いために通常のハードディスクを使用するとコマ落ち等が発生し、編集の際に効率は大きく下がることが予想されたため、今回はかねてより協力体制を築かせていただいている株式会社HGSTジャパンに協力を打診。業務用の大型RAIDハードディスクを貸与していただいた。

業務用RAIDと編集用PC

代表的な撮影シーン解説（森の中のメインビジュアル撮影）

本プロジェクトでメインビジュアルの一つである西川材の森でのキャスト撮影。この現場ではスモークマシンを使用するために発電機を用意した。それに伴いスタッフ人数も最大規模となっている。撮影機材も電動ジンバルやドローンなど多くを活用した。時期が真冬であったこともあり、気温や日照時間、積雪など撮影は困難極めたが学生スタッフの協力もあり成功させることができた。本プロジェクトを行なった一つの成果と考えている。

4. ポストプロダクション

編集作業は Apple 社の Mac Pro と同社製 Final Cut Pro X を基本として行うこととした。このシステムにより、大学内メディア工房での作業も可能になり OB スタッフと現役学生のスタッフが協力して進めることも期待された。これらの機材は性能差はあるものの一般的なもので、必要に応じて作業場所を随時検討変更できる点も大きなポイントである。実際に今回の作業内で計 4 カ所を適宜使用することで進めた。今回と同様のクオリティで映像制作を行う場合、以前であれば高価な編集機材を要するために専用のスタジオを使用するほかなかったが、汎用パーソナルコンピュータの性能向上の結果、このような形態が取れるようになった。

配信・上映

企画が立ち上がった時点では具体的な公開方法に関しては深く議論されていなかった。検討段階では飯能ケーブルテレビでの CM 放送や、電車内での放送なども項目に上がったものの、現段階では実現できていない。Youtube 上の同映像へのリンクが市役所 Web ページや大学 Web ページで紹介されている事にとどまっており、今後の動きは更に検討する必要があると思われる。

5. プロジェクトの課題と考察

課題　撮影スタッフの確保

本プロジェクトでは撮影のほぼ全てがロケーション撮影となる。前述した撮影のように発電機など重い機材も使用しての撮影もあることから相応の人数の撮影スタッフ確保が必要と想定された。これまでも授業外の撮影プロジェクトは何回か行ってきており、スタッフ確保も可能と思われていたが、現実的にはここが大きな課題となった。

個人差はあるものの、授業時間外での活動に対する意識の変化とアルバイトを筆頭にした学生の一種の忙しさ。また、ロケ撮影の場所が市内とは言え山間部が多く、1 日がかりになることが多いため、授業とバッティングしてしまうなど、（当初は練度が伴わなくても）プロジェクトを通して経験値をあげていくというプロジェクト開始時の目論見が成立せず、結果的に練度が高く技術的にも相応のスキルをもつゼミOB、OG を動員せざるを得なかった。屋外ロケが大半で天候により撮影日が直前に変更になるなど、スケジュールの変動要因が大きかったこともその一因である。

これはプロジェクトにOJT的な意味合いを持たすという当初の目的と相反することになり、大きな課題を残した部分でもある。

課題　編集作業の一極集中

ポストプロダクションの項で記述した通り、今回編集作業に関しては柔軟なシステムを採用した。これは作業効率、場所が限定されることへの危惧、複数人の編集者への対応などを設定した上での決定だったが、これが効果的に働いたかは疑問が残る結果となった。編集作業を行う上では全素材を把握している必要があり、今回のような撮影が長期にわたるプロジェクトの場合それは困難になる。また、撮影期間が納期間際まで延びたこともありワンストップ化が必要になったことも大きい。

課題　教育的観点

本プロジェクトが大学に依頼され、学内に勤務している高田が制作責任者に就いた時点でそこに

は教育的な意味が生まれたと考える。実際の進行もそれを念頭に置き計画していったが、残念ながらすべてが計画通り機能したとは言い難い。

その理由の大きなものとしては、やはり制作物のクオリティの確保にある。実際に予算が動き、多くの関係者が動くプロジェクトでは大学の教育という意義と同様にクライアントへの責任が発生する。外部の民間施設や自然を相手にしているため失敗＞やり直しが難しく、そのプレッシャーのなかでクオリティの担保を優先し、練度の高い経験者頼みになってしまったのが現実である。

6. まとめ

制作終盤で諸般の事情からスカイツリーの使用ができなくなり、プリプロダクションで計画していたシンボル映像は、西川材を多用したガラスとコンクリートの現代建造物である飯能市立図書館に変更した。その日程調整もあり制作日程が逼迫、完成が年度内ギリギリになったのは反省点である。

大学と地方自治体の共同研究事業として、仮想的に飯能市農林課をクライアントとし、大学が代理店、制作会社が高田助手をトップとする制作チーム。そのチームスタッフの多くを学校卒業生や現役の学生を起用し、学生の経験値としての効果も期待できる学内OJTを目指し始まった本プロジェクトであるが、結果として前述の少なくない課題が残る結果となった。成果物のクオリティ確保と学生に対する教育機会の両立は、大学内での映像制作プロジェクトを今後も進めていく上で最重要な課題と考えており、ゼミナールとの協力体制なども念頭に入れ今後も検討すべきことと考える。

監修 飯能市森林課
総監督 斎賀和彦
監督 高田昌裕
（メディア情報学部付きエンジニア）
メインスタッフ 榎戸 智幸（斎賀ゼミ OB）

Production of PR images through collaborative work with local governments

[Abstract] There is a big gap between "educational video production scene" and "actual video production scene”. In the fact, It is not the same between the educational scene that places emphasis on the fundamental principle and theory, and the rapid progress of the production tool and the rapidly changing production scene. But we are hoping that we do not want education to be a just desk theory.

This research is a record and consideration of the promotion movie project of the local industry which adopted the student as the main staff in the form of a joint project between the university and the local government.

[Keyword] Filmmaking,promotion of regional development,industry-university cooperation, on-the-job training